25 journal
society&business Tokyo25 journal
執筆協力 編集室システムU　okamura.nobuyoshi@gmail.com

石川酒造と瑞穂農芸高生が共同開発
酒かす育ちの豚のハムなど試食販売

石川酒造（福生市熊川）と都立瑞穂農芸高校（瑞穂町石畑）の共同プロジェクトで生まれたハムやソーセージが6月21日・22日、同酒造の直営店「見つかる！　多摩のイイ品たまてばこ」（昭島市）で販売された。

同酒造は、日本酒やビールの製造過程で出る酒かす、米ぬか、ビールかすを同校へ無償で提供している。酒かすなどは同校畜産科学科や園芸科学科で、飼料や肥料として活用されている。

売り子を務めた高校生と伊勢教諭

畜産科学科の授業では豚の飼育から出荷まで一貫して取り組んでいるが、企業と連携した商品の開発、販売は今回が初めて。

豚肉を活用することで学びの裾野を広げることができると、今年から同酒造傘下の「大多摩ハム」（福生市）で加工。ソーセージ、ハム、ベーコンとして商品4種を製造した。

両日とも高校生が試食を勧めながら、ロースハムスライスパック（63グラム）、ベーコンスライスパック（65グラム）、ポークウインナー（100グラム）、あらびきポークウインナー（同）を販売した。

21日に売り子を務めたいずれも3年生の田村月歩さん＝**写真中央**＝と橋本心海さんは「試食してもらい『おいしい』と言われうれしかった。育てて良かったと思った」とにっこり。指導の伊勢博祥教諭は「生産の先が見られて良い勉強になったと思う。継続して取り組めたい」と話した。

同酒造営業部長の小池貴宏さんは「高校生の学びを深めるだけでなく、SDGsの目標達成にも貢献する地域連携の取り組み」と手応えを感じていた。

旅する星のかけら～隕石
瑞穂町　けやき館で実物を身近に

瑞穂町郷土資料館けやき館（瑞穂町駒形富士山、042-5684-0634）で現在、ミニ展示企画「旅する星のかけら～隕石（いんせき）～」が開催されている。月の隕石を含む3個の隕石を国立極地研究所（立川市）から借りて展示している。

隕石は通常、長い時間をかけて地球に到達する。石には多くの未知の情報が詰まっており、「太陽系の誕生の歴史」「生命の起源」の解明につながるヒントなどが含まれているという。

展示するのは、月の表面から宇宙空間に吹き飛ばされ、地球に落下した「月隕石」、大きな隕石をスライス分割し、断面を表出した「普通コンドライト」、大きな隕石を分割した「普通コンドライト」の3個。写真や図を交えて展示する。

同館職員の田野倉力さんは「実物を間近で見ることのできるチャンス。隕石が宇宙のロマンを語りかけてくれるかも」と話す。

開館時間は9時～17時。入館無料。7月13日まで。

津軽海峡単独横断
女性初の成功者
尾迫千恵子さんが檜原で講演

31年前に津軽海峡の単独横断遠泳に女性で初めて成功した尾迫千恵子さんが6月16日、自身が10年余り前から水泳指導に携わる檜原小学校（檜原村本宿）を訪れ、「遠泳人生」をテーマに講演を行った。

展示された尾迫さんの遠泳の記録

元同村職員で、遠泳選手の傍ら長く尾迫さんのコーチを務めてきた宇田快さんが、尾迫さんの体験を聞かせたいと講演会が実現。同校1年生～6年生の57人が参加した。

尾迫さんはピアノ講師の傍ら、30歳を過ぎて遠泳を始めた。函館に住んでいたこともあり、津軽海峡への思い入れがあり、1987（昭和62）年から数回にわたって横断遠泳に挑戦している。

「遠泳人生」を語る尾迫さん

1994（平成6）年8月6日、対岸の青森県中泊町から12時間28分かけて福島町松浦に泳ぎ着き、津軽海峡の単独横断に成功した。距離は直線で27キロ、潮の流れを迂回すると50キロになった。

尾迫さんは、監督やスタッフ、伴走船の船員、公的機関の許可など多くの人の協力があって実現できたことに感謝した上で、潮流の激しさ、体温の低下などを乗り越えゴールした体験を披露。「諦めないことが大切」と児童に呼びかけた。

尾迫さんは現在、中泊町のPR大使を務め、津軽海峡交流大使の宇田さんと遠泳の普及や遠泳を通した町の活性化に協力している。

講演会の最後に、宇田さんは「森は海の恋人」の言葉を児童と共に繰り返し、「この言葉を檜原村に住む人として忘れないで」と呼びかけた。